

---

# Pandemonium

にふらむ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

P a n d e m o n i u m

### 【Nコード】

N 4 0 7 5 S

### 【作者名】

にふらむ

### 【あらすじ】

父の仕事の関係で泉豊は、腹違いの妹であるネリー・ランドールと共に田舎の祖母が住む大磯町へとやって来る。だが、その町には豊の常識を超える出来事が数々存在し……？\*この作品は、以前作者が投稿していたE s c a p e f r o m r e a l i t yという作品（URL：t t p : / / n c o d e . s y o s e t u . c o m / n 6 6 1 6 h / ）を書き直し、設定などを色々変更した作品になっています。

## Prologue・生贄

彼女を発見した時、その瞳は既に光を失っていた。

### 《Sacrifice》

彼女の周りには黒の外套を身に纏った悪魔崇拝者達の死体が転がっている。

その光景から導き出される答えは一つしかなかった。

この少女は、悪魔を呼び出す生贄に捧げられた。

しかし、その儀式は失敗に終り……その代償として彼女は魂を喰われ、崇拝者達は殺された。

生贄に捧げられた少女を救う為にやって来た私にとって最も恐れていた結果であった。

もうこの場所に私の存在は必要ない。

後は、私が所属している組織が何とかするだろう。

私は、無言のまま抱き起こした少女を地面へと横たえ、その地を去るはずだった……

「……………っ!？」

だが、私が彼女を地面へと横たえた瞬間……彼女は私の服を掴んだのだ。

「……………」

そして、その目が私に救いを求めている気がした。

「……………なら、私の所へ来るか？」  
少女は、答えない……………。

だが、何も語らない彼女の口から確かに聞こえた。

私を助けて欲しい、と。

## P r o l o g u e ・ 生 贄（後書き）

どうも、にふらむです。

ようやくプロローグが完成、色々と迷走しておりますが完成に向けて頑張りたいと思います。

補足：以前の作品である E s c a p e f r o m r e a l i t y は、此方の作品がこちらの話の展開に追いつくまでは残しておこうと思っています。

## Episode 01・夏

夏休み、本来なら自宅で涼しいクーラーなどを浴びながらネットゲを楽しんでいる予定だったのだが……

「……何処だよ、此処？」

何故か、俺は……見慣れないフェリー乗り場にいた。

《Summer》

目の前のチケット売り場に設置されている行き先を知らせる掲示板には、大鵜島行きと記されている。  
おおぬえしま

親父が仕事で忙しく家に帰れなくなるからと俺を田舎の祖母の所へ預けると言い出したのだ。

正直な話……もう高校生なんだし、家に一人で留守番なんて平気なのだが……  
どうやら、今回俺の田舎行きが決まってしまった理由は他にもあるらしく……

「……………」  
そのもう一つの理由というのが、さっきからずっと物陰で俺の様子を窺っている麦わら帽子を被った金髪の少女の存在にある。

「……何だよ？」

俺は、少し表情を歪ませながら少女に声をかけた。

「……………」

すると、彼女は逃げる様にフェリーのチケット買いに行った親父の元へと走って行ってしまった。

「はあ……」

あの娘は、十日ほど前に親父が連れてきた子で俺の腹違いの妹にあたる存在だと聞かされた。

……つまり、親父の隠し子である。

親父が浮気していた事にも驚いたが、俺にこんな歳の離れた妹いるとは夢にも思わなかった。

ネット仲間にその話を聞かせたら、何そのエロゲ展開と散々羨ましがられ……じゃなかった、冷やかされた。

まあ、俺だつて知らされてから十日しか経っていないので未だに信じられずにいる訳なのだが……

……親父の言った事が真実なら兄として優しく接してやるべきなのだろうか？

……いや、無理だ。

俺、人と話すの苦手だし……相手が女なら尚更だ。

歳はまだ聞かされていないが、恐らく五歳か六歳くらいだと思われる。

俺が今年で十六だから十歳近く歳が離れている事になる……親父、無茶すぎるだ。

「お待たせ、大鵜島行きチケット買ってきたぞ」

俺が妹（仮）との接し方に頭を悩ませている間に、親父がフェリーのチケットを携えてチケット売り場から戻ってきた。

「なあ、親父？ 本当に行かないとダメか？」

俺は、未だに夏休み中に予定していたネットゲライフが諦めきれず親父にそう尋ねてみるが答えは当然……

「駄目だ、お前ら二人だけじゃ何かと不安だからな」

……まあ、俺もこの妹（仮）と二人きりにされるよりは間に婆ちゃんがいいた方が良いけどさ？

……あっち田舎じゃ、ネット環境が絶望的なんだよ。

「……ちえっ」

その様子を見て親父は、俺が機嫌を損ねているのに気付いたのか励ましのつもりで次の様な言葉を呟いた。

「まあ、夏休みが終わるまでの間だけだ。それが終われば自宅に戻って構わない」

なるほど、期限付きねえ……少しは救いがある、のか？

その後、俺は親父を説得するのに失敗し、強制的に妹（仮）と共にフェリー乗り場まで歩かされる事となった。

しかし、ここで更なる問題が発生。

「……なあ、親父？」

俺は、親父に紹介されたフェリーとやらの視線を向けながら口を開いた。

「ん、何だ？」

親父は、その俺の言葉に何食わぬ顔で答える。



「このオンボロ船は、何だ？」

そう俺が指を刺した先にはフェリー……というより、明に港で漁師さんが乗っていきそうな小型漁船を改造してフェリーとして使っている様な恐ろしい代物があった。

しかも、その船体は茶色く錆び付いていて至る所に傷が無数に付いている。

「何って、フェリーだろ？」

……いや、絶対違うと思う。

「……これ、ちゃんと向こう岸まで着くのか？」

俺は、その船体を見て誰もが呟くだろう台詞を口にする。

「大丈夫だろ？ お金貰って人を運んでるんだ、安全は保証されるはずだ」

安全は、保証……ねえ？ なら、もっと船の管理を徹底すると思うのだが……

「……ふうん」

俺は、その親父の発言に少しだけ安心し、目の前にあった船首に取り付けられている猿？ の顔の様なオブジェに手を触れた。

「……えっ？」

すると、そのオブジェはいとも簡単に船首から外れ、完全に折れてしまった。

「……」

親父と俺は、ほぼ同時に顔を見合わせ驚愕の表情を浮かべる。

その背後では、俺達の様子を不思議そうに見つめる妹（仮）がいた。

「な、なあ……親父？」

暫し沈黙が続き、俺はようやく口を開く事が出来た。

「……だ、大丈夫、大丈夫だ、うんうん」

しかし、その後続く言葉の内容を予想したのか……親父がそれを遮る様に会話に割り込んできた。

親父、俺……まだ何も言つてねえよ……

「おっ？ お主ら、今回の乗客か？」

俺がそんな親父に絶望していると、船の持ち主である初老の男が姿を現した。

らくだシャツと股引、腹巻と典型的なオヤジスタイルで現れたので若干驚いたのは内緒だ。

「待たせたのう、わしがこの船の船頭を務める大西茂男おおにしげおじゃ」

その老人は、律儀に頭を下げ自己紹介を始める。

「さて、さつさと乗り込んで……って、ぬああーっ!？」

茂男と名乗る老人は、突然叫び声をあげたかと思うと……俺が手に持っている猿の頭を指差した。

「お、お主、何壊しとんじゃっ!」

……いや、壊したくて壊したんじゃないんですけどね？

「……昨日、瞬間接着剤で直したばかりなんじゃぞ」

ああ、それは申し訳ない事を……って、ヲイ？

「す、すいません」

色々とツツコミ所が満載であつたが、俺は素直にその茂男さんに猿の首を壊した事を詫びた。

「……もういいわい、さつさと乗りい？ 出発じゃ」

俺が船に乗り込もうとしている茂男さんに猿の頭を返すと茂男さんは、無言のままそれを船内に投げ込んだ。

……船内に転がる猿の頭が人間の生首に見えて、かなり不気味だ。

今までの発言聞いて分析した結果、この船に乗るという選択は極めて危険であると判明した訳なのだが……

親父を説得するのも茂男さんに文句を言うのも面倒になり、俺は彼の言うとおり大人しく船に乗り込んだ。

「……どうか、生きて帰れます様に」

だが、まだ陸にいる妹（仮）は親父と何やら話し込んでいるらしく中々船に乗り込もうとしない。

「何じゃ、お主ら兄弟か？」

船内で退屈そうにしている俺に気付いたのか、茂男さんが声をかけた。

「……まあ、まだ（仮）ですけど」

俺は、親父の妹発言が未だに信じられないのでそんな微妙な返事を返した。

「……何じゃそれ？」

まあ、その問いに答えた所で茂男さんが理解できるはずもなく……

「あ、いえ、何でも……はは」

俺は、そんな茂男さんに愛想笑いを浮かべる事しか出来なかった。

「……………」

そんな風に茂男さんと話しこんでいると妹（仮）が無言で船内へと乗り込んでくる。

「ん、もう良いのか？」

無言で船に乗り込んできた妹（仮）に、出発して良いのかの確認を取る。

すると、彼女は無言のままだが首を縦に振った。

「茂男さん、もう行っても良いそうですよ」

それを確認した俺は、茂男さんに出発する準備が出来たと報告する。

「よし、じゃあ出発するぞー？」

まあ、向こう岸に着くかは……以下略

「おい、豊」

俺は、沈没した場合はどうやって生き延びようか真剣に悩んでいると陸に残っている親父から不意に声をかけられた。

「……………ん？」

俺は、そんな親父に何事かと視線を向けた。

すると、親父は無言で何かを投げて寄越してきた。

「おっと」

俺はそれを何とかキャッチし、親父が投げつけてきた物を確認する。

それは、神社などで売られている茜色のお守りだった。  
何でこんな物を？ と、再び親父に視線を向けた。

「お守りだ、何があっても……きっと、お前達を守ってくれる」  
なるほど、親父も親父なりに俺達の事を心配してくれているんだな  
……

だが、親父……一つだけ言わせてくれ？

「……これ、中央に安産御守って書かれてるんですけど？」  
案ずるより産むが易しってか？ 何がしたいんだ、親父は……？

こうして、俺と妹（仮）は祖母の住む大鵜島へと向う事になってしまったのだった。

## Episode 2・妹

結局、茂男さんの運転する船は沈む事無く大鶴島まで辿り着いた。

「また利用してくれや〜?」

船を降りる時、茂男さんにそんな事を言われたが命が惜しいので丁重にお断りしておいた。

その後、俺は親父から貰った地図を頼りに祖母の住む家へと歩いて向かう事にした。

「……………」

当然、俺の後ろには無口な妹（仮）の姿もある。

俺が歩くと奴も歩き、俺が止まると奴も止まる…………それが延々と続いている。

俺がそのループ現象に耐えられなくなり、後ろを振り向いて奴に視線を送ると…………

「……………」

奴は大急ぎで隠られる場所を探し、そこへ身を隠す…………これも先程から何度も繰り返されている。

「はあ……………」

そして、俺は諦めて再び歩き出すのだ。

正直、面倒くせえ…………それが俺の本音である。

《Little Sister》

茹だる様な暑さに体が参ってしまい、休憩もかねて近くの駄菓子屋に立ち寄った。

「あゝ、生き返る」

暑さに耐え切れず、俺はその駄菓子屋でアイスを買って食べ始めた。

.....

すると、俺の横で妹（仮）がアイスの入ったクーラーボックスを熱心に見つめているのに気づいた。

「ん、何だ、お前も食いたいのか？」

流石に自分だけ食べているのはまずいかなと思い、妹（仮）にそう声をかけるが……

...

歩いていた時と全く同じ反応で妹（仮）は、駄菓子屋から逃げ出してしまった。

「……  
 どんだけ嫌われてんだよ、俺」

その妹（仮）の行動にショックを受ける俺であったが、奴が熱心に覗き込んでいた位置に置いてあったアイスを取り出し会計を済ませる。

.....

そして、外の電柱に隠れている妹（仮）に無言で近づき……

「ほら」

そのアイスを差し出してやる。

それは、一本五十円で売られている一番安物のアイスで食べ終えた後にアイスの棒に“当たり”と書かれているともう一本貰えるというお得な商品なのだ。

……まあ、簡単に言えば　リ　リ君である。

俺がそんな“著作権的な意味で”危険な代物を妹（仮）に差し出してみると……

「うおっ」

妹（仮）は恐る恐る近づき、俺の手からそれを受け取ると……

「……………」

物凄い速度で元の位置に戻って行ってしまった。

「お前は動物かつ」

妹（仮）のその動きに思わずツッコみを入れる俺であった。

「……………まあ、予想はしてたんだけどさ」

俺は妹（仮）に構っていたらアイスが溶けると駄菓子屋の横に設置されている椅子に腰掛け、食べかけのアイスを再び食べ始めた。

「……………」

妹（仮）は相変わらず電柱に身を隠し、そこで俺が買ってやったアイスを食べている。

……身を隠しながら食べているので非常に食べ辛そうだ。

「おい、お前」



困った表情を浮かべているのを見て、仕方なく俺は声をかけた。  
すると、電柱の後ろで妹（仮）が体を跳ねらせる。

「そんな所じゃ食べ辛いだろ？ こっちで一緒に食べようぜ？」  
そう俺が手招きすると、妹（仮）は遠慮がちに近づいてきて……俺の横に座った。

勿論、距離を離してだが……

「……………」  
そして、無言のまま二人でアイスを食べ続けた。

……そんな微妙な空気の中、食べたアイスは意外に美味しかった。

・ ・ ・

「さて、そろそろ向かうか」  
数分後、アイスを食べ終えた俺は包装紙をゴミ箱に捨て、立ち上がった。

「……………」  
だが、妹（仮）は俺より先に食べ終えたはずなのにアイスの棒を捨てようとせず、じっとそれを見つめている。

「何だ、まだ食い足りないのか？ だが、今月の小遣いはもう……」  
無いと呟こうとして近づいてみると、妹（仮）がその棒を見つめている理由が判明した。

妹（仮）の手に持っている棒には、文字が書かれており……そこに  
は“当たり”と書かれている。

「おお、当たってるっ」

興奮して俺が若干大きな声で呟いた瞬間、妹（仮）は再び凄い速度  
で電柱の後ろに逃げてしまった。

「いやいや、当たり、それ当たりなんだよ、もう一本貰えるの」

俺は、身を隠して脅えている妹（仮）に例のアイスのお話を聞かせる  
事に……

だが、何故か妹（仮）はその棒を新しいアイスと交換するのを頑な  
に拒否するので……

「……もう、いいです」

俺は、諦める事にした。

その俺の言葉に満足したのか、奴はアイスの棒を見つめて目を輝か  
せている。

「……変わった奴」

アイスの棒なんかで喜ぶ妹（仮）の姿を見て、そんな言葉が自然と  
口から出ていた。

## Episode 03・記憶

幼い頃の記憶というものは、実にいい加減なものである。

「こ、これが婆ちゃん家？」

俺は、小学生の時に一度……この島を訪れた事があるのだ。

しかし、その時の記憶では婆ちゃん家は普通の二戸建ての大きな家だったはずなのだが……

今、俺が妹（仮）と一緒に見つめている“それ”には看板が取り付けられ、そこには“ようこそ、いずみ屋へ”などと書かれていた。

俺は、親父のメモを何度も確認し……ここが婆ちゃんの家かどうかを再確認する。

だが、間違いなく親父のメモにはこの場所が記されており、俺は覚悟を決めてその建物の中へと突入した。

背後では、心配そうに妹（仮）が見つめている。

ああ、何だかんだで俺の事を気遣ってくれてるんだなあと心の中で感動していると……

「こらあああつー！」

突然、怒声が聞こえ奥から俺とそう歳が変わらない女と口に焼き魚を啜えた子猫が姿を現した。

「ひっ」

俺は現れた女の怒声に驚き、間抜けな声を上げた。

その俺の横を魚を啜えた子猫が通過し、先程まで妹（仮）が心配そうに俺を見つめていた場所へ……

だが、そこに妹（仮）の姿は既に無く……目を細めて辺りを伺うとかなり離れた場所から僅かに顔を出している姿を確認する事が出来た。

自分だけ逃走しやがって……さっきの感動を返せ、と心の中で呟いてみたが虚しくなったので止めた。

## 《Memory》

「……くっ、逃がしたか」

後ろでは、子猫と共に現れた女の悔しがる声が聞こえてくる。

「はあ……」

俺と女は、お互いにため息を漏らしながら微妙な表情を浮かべた。

「……ん？」

そして、互いの存在に気づき声を上げる。

「あれ、君……こんな所で何をしているんだ？」

妹の冷たい態度に絶望している所です、なんて答えても絶対理解されないので素直に此处を訪れた経緯を女に説明する事にした。

「なるほど、妙さんのお孫さんだったのか」

俺の話を聞いた女は、何度も頷きながら人の顔をじろじろと観察を始めた。

ちなみに、妙たえというのは俺の祖母である泉妙いずみたえ……つまり、婆ちゃん

の名前である。

「な、なんだよ？」

俺は同年齢の女に見つめられるという状況に耐え切れず、顔を顰めながら彼女に話しかけた。

「あ、いや、すまない、あの人のお孫さんだつて言うから少し興味が沸いてね……」

彼女は、俺の態度を見て不快な思いをさせている事に気づいたのか……素直に頭を下げてきた。

そして、苦笑いを浮かべながら俺を観察していた理由を述べた。

「……私の名前は、桂木日向。かつらぎひなた 此処に住み込みでバイトしているんだ」

桂木のその説明でこの家に何故彼女がいるかという疑問が解消された。

「なるほど、俺は泉豊。いずみゆたか 親父の仕事の都合で夏休み間だけ婆ちゃん家で暮らす事になっちまってさ、少しの間だがよろしく頼むわ」  
俺がそう呟き握手を求めると彼女は笑顔で頷き、俺の手を握り返してきた。

「こつちこそよろしく頼む、君とは良い友達になれそうだ」

何か喋り方が女っぽくないな、というより文章だと完全に男に思われるんじゃないか？ なんて“アレ”な発言を心の中でしていると……

「やっぱり、私の喋り方……変か？ クラスの皆にも言われるんだ、桂木は変な喋り方するなって」

……表情に出ていたんだろうか？ 俺が考えていた事を桂木はその

まま口にしていた。

「い、いやいや、べ、別に变じゃないぞ？ 世の中には標準で語尾に『にや』を付けて喋ったり、『ござる』を付けて喋ったりする奴も大勢いる」

俺は、落ち込んでいる彼女をフォローしようとゲームの中で存在していた特殊言語を喋る連中を例に出して励ましてみた。

すると、彼女は急に表情を明るくし……

「おお、確かに語尾に『ござる』を付ける奴は知り合いにいるな」などと呟いた……てか、『ござる』いるんですか？

「そ、それより、バイトって言ってたけどさ？ 此処って何か店でもやってるの？」

これ以上彼女とこの話を続けたら俺でも知らない特殊言語を喋る連中が大量発生しそうなので話題を変える事にした。

一応、この話は家を訪れていた時から気になっていた事だし、丁度良いと思った訳である。

「店って……豊は、妙さんから話を聞いていないのか？ 此処は」

だが、その話を彼女から聞く事で……俺は先程の話以上に驚く事になる。

「此処は、民宿を経営しているんだ」  
この瞬間、俺は看板に書かれていた文字の意味を理解する事になったのだった。

…… 本当に幼い頃の記憶というものは、いい加減なものである。

## Episode 4・祖母

「……さらば、俺の穏やかな生活」

俺は、哀愁漂う表情を浮かべながら……そんな言葉を呟いた。

俺は、桂木から婆ちゃんの経営する民宿『いずみ屋』について詳しく話を聞く事にした。

そして、彼女から話を聞いた結果……人と関わるのが苦手な俺にとって非常によろしくない環境であると判明した訳である。

「ん、どうした、そんな暗い表情を浮かべて？」

桂木の奴は、そんな劣悪な環境に慣れてしまっているのか……俺のそんな態度を不思議そうに見つめている。

「……なんでもない」

かといって、今更婆ちゃん家に厄介になるのを拒否した所で意味が無い事は理解しているので不満を口にするのを諦めた。

「それで、肝心の婆ちゃんは……？ さっきから姿が見えないけど

……」  
俺は、玄関から民宿内を見渡し……婆ちゃんの姿を探した。

「ああ、妙さんなら買い物に……」

桂木が婆ちゃんの不在を俺に説明していた……丁度その時である。

「おや、可愛らしいお客さんねえ？」

背後から懐かしい声が聞こえてきた。

振り向くと物陰から心配そうに見つめていた妹（仮）に話しかける

婆ちゃんの姿があった。

「……っ」

突然の婆ちゃんの登場に驚いた妹（仮）は、全速力で俺達の方角へと走って逃げてくる。

《Grandmother》

「ん、なあ、泉？ あのと走ってきてる子、君の知り合いか？」

桂木は逃走を開始している妹（仮）に視線を向け、俺にそう尋ねてきた。

「ああ……聞いて驚け？ あいつは、俺の義理の妹なのだ」

俺は、驚いて此方……というより、俺に助けを求めてきているだろう妹（仮）の姿を見て気分を良くして桂木に妹（仮）と俺の関係について説明してやった。

「なるほど、義理の妹ね……随分仲が良さそうじゃないか？」

桂木も此方に走ってくる妹（仮）と彼女の事を自慢げに話す俺の姿を見て、そんな言葉を呟いた。

「そうだろう、そうだろう？ 此処に来るまでに色々あったからなあ……俺と奴は既に固い絆で結ばれているのだよ」

俺がその発言をした直後、妹（仮）が既に目前まで近づいてきていた。

「さあ、この兄の胸へ飛び込んでくるがいいっ」

俺は両手を広げ、妹（仮）が抱きついてくるのを待った。

だが、奴はそんな俺の横を呆気なく通過し……



「えっ、あ……わ、私か？」

何故か、桂木へ抱きついていた。

「……………」

その瞬間、俺と桂木の間に何とも言えない沈黙が訪れる。

「……固いきず「言うな」」

俺はその沈黙に耐えられなくなり、いらぬ事を呟こうとする桂木を即座に遮った。

「あら、驚かせちゃったかい？」

その微妙な空気の中、妹（仮）の後を追って婆ちゃんが姿を見せた。

「別の意味で驚きました、主に私が」

俺と妹（仮）の固い絆を目にし、皮肉る様に桂木がそんな返事を婆ちゃんに返した。

だが、先程までの状況を全く知らない婆ちゃんは……

「????」

と、不思議そうに首を傾げ俺たちを見ていた。

「そ、そんな事よりっ」

俺は、これ以上その話をされたら惨め過ぎて死にそうなので必死に話題を変える事にした。

「ひ、久しぶりだなあ、婆ちゃん」

愛想笑いを浮かべながら俺は、婆ちゃんに声をかけた。

「おや、誰かと思えばゆー坊じゃないかい？ 随分成長したねえ、お婆ちゃん全然気づかなかったわあ」

婆ちゃんは、俺が孫の豊だと気づくと驚いた表情で此方を見つめてくる。

まあ、それもそのはず、俺が以前にこの島を訪れたのは丁度八年前……俺がまだ小学生だった頃の話なのだ。

なので、婆ちゃんのこの反応は、むしろ普通な訳だ。

「しかし、婆ちゃん？ 俺ももう高校生なんだし、ゆー坊は勘弁してくれよ」

昔は、幼かったからそんな愛称で呼ばれても恥ずかしくなかったが……今は別だ。

「そうかいそうかい、ところでゆー坊？ 日向ちゃんの後ろに隠れてる子が例のお嬢ちゃんかい？」  
いや、あの……婆ちゃん？ 今、頷いたよね……？ 頷きましたよね？

「ああ、馬鹿親父の隠し子」  
再びお願いした所で呼び方が訂正されるはずもないと諦め、俺は婆ちゃんの問いに大人しく答えた。

「なるほどねえ、どれどれ」  
婆ちゃんは、俺の言葉を耳にすると妹（仮）に笑顔で近づき……奴に話しかけ始めた。

「はじめまして、お婆ちゃんの名前は妙……泉妙いずみたえって言うの、これから同じ家に住む事になるけど宜しく頼むわね？」  
婆ちゃんは、そうやって手短に自己紹介を済ませると妹（仮）に握

手を求め、手を差し出した。

「……………」

すると、妹（仮）は恐る恐る婆ちゃんの方へと近づき……その差し出した手に触れようと同じ様に手を差し出した。

だが、婆ちゃんと手が触れる寸前に何を思ったのか手を引っ込め、再び日向の後ろへ隠れようと後退り始めた。

「おい、待てよ」

俺は、それを見て流石に堪えきれず、彼女が逃げ去ろうとするのを遮った。

「これから長い間お世話になるんだ、挨拶くらいはちゃんとしとけよ」

礼儀知らずな我が妹を俺は、そうやって叱りつけた。

「……………」

しかし、妹（仮）はその言葉に従わず、俺の腕の下を潜って家の中へと逃走してしまった。

「あつ、こらっ」

そんな妹（仮）に頭にきた俺は、後を追おうと家に上がり込もうとするが……

「ゆー坊、待ちい」

だが、その俺の行動を婆ちゃんが止めた。

「何で止めるんだ、婆ちゃん？」

俺は、まさか止められるとは思っておらず、不満な表情を浮かべる。

「……あの娘にも色々あるはずだから、今はそつとしておいておやり」  
婆ちゃんは俺にそう呟き、妹（仮）が走り去った方角を悲しげな表情で見つめ続けていた。

「ええーつと……あ、そうだ」

その微妙な空気に耐えられなくなったのか、桂木が話題を変えようと俺に話しかけてくる。

「君も疲れただろ？　すぐ部屋に案内しよう……妙さん、良いですよね？」

桂木がそう尋ねると婆ちゃんは笑顔で頷き、夕飯の準備をしてくと奥へ消えて行った。

「……」  
残される俺と日向……。

「悪かったな、妹が迷惑かけて……」

俺は、無関係な桂木に妹の事で嫌な思いをさせてしまったと考え頭を下げた。

「ん、ああ……別に気にしてないさ、私も妙さんと知り合った頃はあんな感じだったしね」

だが、桂木は全く気にしていない様子で俺は胸を撫で下ろした。

「そうか、なら助かる……そういえば、桂木は何で婆ちゃんの所で働いてるんだ？　歳だって俺とそう変わらないはずじゃ？」

しかも、住み込みで働いているなんて……

「そうだな……機会があったら話すよ、今は君を部屋に案内するの

が先だ」

桂木は、俺のその質問に答えたくないのか視線を泳がせ……案内すると先に歩いて行ってしまった。

どうやら、触れてほしくない話題だった様だ……。

数分後、桂木が案内してくれたのは五畳半の和室だった。

中央には木製のテーブルが設置され、壁際には何故か女性が描かれた掛け軸が飾られている。

まさに子供の頃、親父に連れられて旅行に出かけた時に泊まった宿泊施設と瓜二つである。

「布団は、奥の押入れに入っている……必ず朝にはベランダに干して、シーツは三日に一度」

隣で桂木が部屋を使用するにあたっての注意事項を説明してくれているが、その部屋の光景に圧倒され全く耳に入らなかった。

何故ならここに着くまでネット環境をどうやって確保しようかと考えていたが、この光景を目の前にして……それ以前の問題であると気付かされたからである。

それは突然現代から昭和の時代にタイムスリップさせられたかの様な錯覚……。

「……俺、やっぱり家に帰りてえ」

俺は、吾が家のネット環境を懐かしみながら情けない声をあげた。

## Episode 5・夕飯

「はあ……」

俺は桂木に案内された部屋に荷物を下ろし、畳の床に仰向けで寝転がった。

「しかし、本当に……」

する事がない、その一言を言いかけて虚しくなり口にするのを止めた。

「……………」

暇を持て余し視線を泳がせていると壁に飾られている掛け軸に目が向いた。

そこには虚ろな目で此方を見つめる着物を着た女性が描かれており、俺はそれを何故か不気味に感じた。

説明を求められると困るが、この画には何かしらの“力”が感じられるのだ。

人を不安にさせる様な“力”の様な物が……

「って、厨二全開だな、俺」

俺は暇を持て余しすぎて思考回路が危ない方向へ向かっていると感じて、その掛け軸から視線を逸らした。

《Dinner》

「泉、夕飯に支度できたぞ」

すると、丁度タイミング良く桂木が夕飯の支度が出来たと伝えに来

た。

「って、何をやっているんだ君は？」

床で寝転がっている俺を見下ろしながら、怪訝な表情を浮かべている。

「……ん、何でもない」

流星に知り合ったばかりの桂木に例の掛け軸が怖いとは言えず、彼女その問いに俺は適当に答えて誤魔化す事にした。

「そうか、それより食事だ、妹さんの所には妙さんが伝えに行っている」

別に俺が訪ねている訳でもないのに妹（仮）の事を桂木は、俺に教えてくれる。

「……あいつ、また婆ちゃんに迷惑かけてなきや良いけど」

そんな不安を抱えながら、俺は桂木と一緒に部屋を出て飯の準備がされている婆ちゃんの部屋へと向かった。

すると、二階へと続く階段から元気良く駆け降りてくる妹（仮）とその後姿を満足気に見つめ同じ様に降りてくる婆ちゃんの姿があった。

「……………」

妹（仮）は、機嫌が良くなったのか微かに笑みなどを浮かべながら俺と桂木の横を通過して婆ちゃんの部屋へと消えて行った。

「……お、おい、何だこの状況は？」

俺は、玄関先での一件から一変して仲良くなっている二人の姿を目の当りにし、思わず横にいた桂木にそう訪ねてしまった。

「わ、私を知る訳ないだろ……」  
だが、俺と一緒に行動していた彼女がそんな事を知っているはずもなく……そう返されてしまった。

「おや、ゆー坊に日向ちゃん？ どうしたんだい、こんな所で立ち止まって……？」

その光景に啞然としている俺達を見かけ、驚いた様子で婆ちゃんが声をかけてきた。

「……もしかして、あの娘の事かい？」

挙動不審な俺と桂木を目にして妹（仮）の事だと察したのか、婆ちゃんがにやけ顔でそう訪ねてくる。

「ああ、俺には全く懐かないんだぜ……？ 婆ちゃん、一体どんな裏技使ったんだよ？」

誤魔化してもしようがないと思った俺は、素直にそれを認め……婆ちゃんに仲良くなる秘訣などを伝授してもらおうと質問するが……

「ふっふっふ、そりゃ、ゆー坊？ あんたが……いや、やめておこうか」

何故か、拒否されてしまった。

「何で？」

当然、俺は納得がいかないので再び婆ちゃんに尋ねるが……

「……その方が面白いからねえ」  
なんて意味の分からない言い訳をして婆ちゃんは、先に部屋へと歩いて行ってしまった。



余裕の表情で立ち去る婆ちゃんの後ろ姿を悔しげに見送る俺……。

「……………あつ」

それを横で眺めていた桂木が何かを思い出した様に手を叩いた。

「固いきず」「それはもういいつ」「」

……………本当、もう勘弁して下さい。

凹む俺とそれを面白がる桂木は、婆ちゃん達より僅かに遅れて部屋へと辿り着いた。

部屋に入ってみると中央のテーブルに大量のご馳走が並べられている。

「……………凄い量だな」

俺は目の前にあるご馳走に驚きながら、四角いテーブルの丁度東側の席に腰掛けた。

「まあ、私と妙さんで昨日から準備してたからな」

その俺の言葉に返事を返した桂木は、俺から見て西側の席に同じ様に座り込む。

「ふつつつふ、ゆー坊の好きな焼きそばも用意してるよ?」

俺の向かいの席に座る婆ちゃんが嬉しそうに山盛りになっている焼きそばの皿から、食べやすい様に小皿へ取り分けてくれる。

「……………」

その小皿を受け取る時、右側から強い視線を感じて視線を向けると妹（仮）が物欲しそうに小皿を見つめていた。

「つたく、ほらっ」

大好物の焼きそば、その小皿を俺は迷った末に妹（仮）の前のテーブルに置いてやった。

「……？」

妹（仮）は暫く俺のとった行動にキョトンとしていたが自分に焼きそばをくれた事に気づいたのか、僅かに表情が明るくなった気がする。

「おや、おやおや？」

向かいの婆ちゃんがその光景を面白そうに観察している。

「なっ、なんだよ？」

「別にい……？ ふっふっふ」

何か腹立つ……が、怒ったら怒ったで後悔する羽目になりそうだから遠慮しておく事にした。

再び、俺は小皿に焼きそばを取り分けてもらい、口にしようとしたが婆ちゃんと桂木が礼儀正しく両手を合わせ始めたので仕方なく同調する事にした。

その俺を見ていた妹（仮）も俺を真似する様に慌てて手を合わせる。

そして、約一名を除いた全員で食事前にお決まりのあの言葉を呟いた。

「いただきます」

その日食べた婆ちゃんの焼きそばは、子供の頃食べた時のよりも美味しかった……。

## Episode 05・風呂

「風呂、ね」

俺は、ひらがなで大きく“ゆ”と書かれた暖簾に手を伸ばした。

あの後、夕飯を食べ終えた俺は暇潰しに宿内を散策していたのだが

……

「相変わらず落ち着きがないねえ、部屋で大人しくできないのかい？」

などと婆ちゃんに小言を言われ、若干凹みながら部屋に戻ろうとしたのだが途中で桂木に声をかけられた。

「暇なら、風呂にでも入ったらどうだ？ 此処の風呂は凄いぞ？」  
家でネトゲ三昧な生活をしていた俺にとって、久しぶりに聞く単語であつた。

「……風呂お？」

普段シャワーだけで済ませている俺は、当然面倒な表情を浮かべる。

「いや、此処のは本当に凄いんだぞ？ 普通の浴場の他にな？ 奥に石段があつてそこを」

だが、そんな表情を浮かべる俺を無視して桂木は此処の風呂の凄さを語り始めた。

その後、ここの風呂は地下から温泉を汲み上げているとか効能が凄いと延々と話したので内容を端折らせてもらう事にする。

桂木の話では、とにかくここの風呂は凄い、らしかった。

そんな訳で桂木が強く薦めてくるので俺は仕方なく浴場に向かう事にしたのだ。

そして、現在に至る……である。

「本当……女は、苦手だ」

俺は彼女の言う通りに風呂へ入ろうとしている自分が急に虚しくなり、溜息交じりにそんな言葉を呟きながら脱衣所へと入る。

「……………」

中を覗くと当然誰も居らず、俺は無言のまま服を脱ぎ始めた。

桂木に今宿泊している客の人数などを夕飯の時に尋ねたのだが、驚いた事に泊まっている客は雑誌の取材で宿泊している記者の方だけらしく、そのお客も深夜まで仕事で部屋を空けている為、現在風呂を利用する客はいないんだとか……

なので、今はほぼ貸切状態だと嬉しそうに語っていたが……それでこの民宿の経営は大丈夫なんだろうか？

「……此处、潰れたら家に戻れんのかな？」

そんな不謹慎な発言を口にしながら腰にタオルを巻き、入浴準備を整え浴場へと続く扉に手をかけた。

そして、誰もいないと聞かされていたので豪華にその扉を開けた。

「…………え？」

その瞬間、全く予想外な出来事に俺は言葉を失った。

そこには、先客がいたのだ。

《B a t h》

「か、か、桂木い！」

俺は、大慌てで浴場を飛び出し風呂に入るように薦めた張本人を必死で探し回る。

宿内を搜索した結果、桂木は妹（仮）と一緒に婆ちゃんの部屋でテレビを見ていた。

「桂木い！」

「なっ、泉……君はなんて格好でっ」

「……っ」

腰にタオル一枚の姿で現れた俺を見て桂木は絶句し、妹（仮）は驚いて逃走した。

だが、今はそんな些細な問題を気にしている場合ではない……俺は目の前の女に言いたい事があるのだ。

「お、お前……風呂場は貸切状態だと言ったよなっ？」

「い、言ったが？」

半裸状態の凄まれ、気圧されたのか桂木は冷や汗をかきながら俺の言葉に黙って頷いた。

「普通に人いたぞっ！ しかも、女っ！ 俺……生まれて初めてだぞ？ こんな姿で土下座したの」

俺は頭の中で風呂場での出来事を思い出し、頭を抱えて膝をついた。

「えっ、そんなはずは……」

話を聞いた桂木は、顔を青くし焦り始めた。

「どうしてくれんだよっ、これじゃあ俺が変態みたいじゃねえかつ

「！」

そう叫んで再び頭を抱えた所で背後から物騒な声がした。

「……大丈夫、あんたはもう十分変態だよ」

「……え？」

何時の間にか来ていた婆ちゃんが後ろで怖い表情浮かべて俺を睨んでいる。

横には、そんな婆ちゃんにしがみつく妹（仮）の姿が……

「オマエカ」

俺は、婆ちゃんを召喚した張本人に恨み言を呟きながら睨みつける。

当然、奴は怖がって逃げて行き、婆ちゃんの表情が更に怖い事になった……

「ゆー坊、ちよつとこっち来な」

「お、お婆様、これには深い理由が……」

命の危険を感じた俺は、それを必死に防ごうと説得を試みるが……

「……いいから来な」

「……はい」

失敗に終わり、俺は説教部屋という名の処刑台へと連行される事となった。

・ ・ ・

その後、婆ちゃんから有難いお言葉と共に拳骨を頂いた。

その影響で床に頭から突っ伏し、体をぴくぴくと痙攣させていると

……

「……………」  
何時の間にか戻ってきた妹（仮）が、俺の生存を確認するかの様に耳かきの様なもので突いてくる。

正直、鬱陶しいのだが怒鳴って妹（仮）を泣かしたら今度こそ婆ちゃん俺の命を刈り取る気がして我慢した。

「戻りました」

俺がそんな理不尽な目に遭っている間に浴場の様子を見に行っていた桂木が戻ってくる。

「おかえり……で、どうだった？」

婆ちゃんも俺の話を聞き、気になっているのか結果を桂木に尋ねる。

「それが、誰も……」

桂木がその言葉を口にすると同時に視線が一齐に俺へと向けられる。

「い、いやっ、マジで見たんだって」

俺は全員から疑いの眼光を向けられ、必死に嘘を付いていないと弁解するが……

「ゆー坊、そういう冗談は笑えないよ？」

あんたのせいで変な噂が立つたらどうすると冷ややかな目で婆ちゃんには注意され……

「きつと疲れて幻が見えたんじゃないか？」

桂木には、微妙な表情でこんな事を言われる始末だ。

結局、二人は俺の言葉を信じてくれず……仕事があるからと部屋から出て行ってしまった。

「……本当に、見たんだよ」  
二人に信じてもらえない事が悔しくて部屋で一人、俺はその言葉を  
呟いた。

「……………」  
だが、誰もいないと思った部屋には相変わらず無言のまま俺を見つ  
める妹（仮）がいた。

「……………何だよ」  
風呂の件で機嫌が悪かった俺は、黙ったままの妹（仮）を睨みつけ  
る。  
そんな俺を暫く見つめていた妹（仮）は、無言のまま俺に近づき…  
…何故か俺の頭を撫でてきた。

「……………」  
「おま、何して…………？」  
その行動に固まっていた俺であったが、急に恥ずかしくなり妹（仮）  
に撫でるのを止める様に指示したのだが一向に止める気配が無かつ  
た。

無言で俺の頭を撫で続ける妹（仮）の姿を見て、こいつはこいつな  
りに俺を心配してくれているんじゃないか、と思えてきた。

「さ、さ、さんぎゅ」  
凹んでいる俺を心配してくれている妹（仮）にお礼の言葉を口にし  
ようとした時だ。

俺は、二人が部屋を立ち去ってから例の風呂場には戻っていなかつ  
たりする。



なので、未だに腰にタオルを巻きつけているだけの格好な訳だ。  
そうなれば当然、夏とは言えこんな裸同然の格好では体が冷える訳である。

そして、絶妙なタイミングでその瞬間は訪れた。

不意に寒さの影響で鼻がむず痒くなり、そのまま俺は……

「ぶわつくしょん！」

盛大にくしゃみをしてしまった。

凄い勢いでぶちまけたもんだから、俺は咄嗟に目を瞑った。

そして、再び目を開くとそこに……奴の姿は無かった。

部屋の外からは凄い勢いで廊下を駆けて行く誰かの足音が聞こえてくる。

「……やっちまった」

どうやら、奴が俺に気を許すのはまだまだ先の様である。

## Episode 6・ワト

風呂の一件で何もする気が起きなくなった俺は、今日は大人しくしていようとさっさと寝る事にした。

部屋に戻り、押入れから布団を引っ張り出して床に敷いていく……ふと壁に飾られている掛け軸の事が気になり、視線をそちらに向ける。

「……………」

やっぱり、あの画は不気味だ。

俺はその掛け軸から距離を置くように布団を敷き、その上に大の字で横になった。

そして、今日一日の出来事を振り返っている内に瞼が重くなり……自然と眠りに落ちていた。

《No human》

……サナイ。

闇の中、不意に声が聞こえた気がした。

「……ん」

俺は何かの聞き間違いだと寝返りを打ち、再び眠りにつこうとするが……

……サナイ。

その不気味な声が俺の睡眠を妨害してくる。

「……っせえな」

俺は顔を顰めながら、起き上がって声の主を探す事にした。

目を開き、体を起こした時点で俺は……声の正体を知ることになる。

……ルサナイ。

声の正体は浴場にいた女だった。それが何故か俺の部屋に忍びこみ何やら独り言を呟いているのである。

不気味、異常、恐怖、危険、死、そんな言葉が俺の頭の中に浮かび上がる。

何故なら、“それ”は寝ている俺を足で挟む様に立っているのだ。

そして、“それ”は寝ている俺を見下ろすかのように視線を此方へ……それを見た途端、背筋が凍った。

……“それ”は確かに“ヒト”だ。“それ”の足が俺の寝ている布団を踏みつけている感触が直接感じられる。幽霊の類なら、物や人に触れる事は出来ないはず……だからである。

……でも、“それ”は“人”じゃない。何故なら彼女の瞳は何かで割り貫いたかの様に空洞であったからだ。

“ヒト”は俺の視線に気づいた瞬間、悪魔の様な笑みを浮かべ先程まで聞き取れなかった言葉を再び口にした。

ユルサナイ。

「あゝあゝあああつ！」

絶叫した。それ以外に俺が選べる選択肢はなかった。

その瞬間、俺の意識は覚醒し……叫び声をあげながら布団から這い出た。

辺りを見渡すが、俺を見下ろしていた“ヒト”は既に姿を消していた。

夢だったのか、そう思い始めた頃に何者かの視線を感じた。

恐る恐るそちらへ視線を向け、目に飛び込んできたのは……例の掛け軸だった。

「……やっぱり、あれは」

何かある、そう呟こうとしたが唐突に暗かった部屋に照明が点される。

「……こんな深夜に何を叫んでいるんだ、君は？」

気付かぬ内に、渡り廊下から桂木が顔を出していた。

「……い、いや、なんでもない」

言った所で誰も信用してくれない、そう思った俺は部屋で起こった事を口にするのを止めた。

「そうか？ まあ、何かあったら気軽に声をかけてくれ」

まだ仕事しているから、と笑い部屋を出て行った。

桂木が出て行った後、俺は寝ていた布団に視線を向ける。

「……眠れる訳ねえだろ」

あんな体験をした直後からか、眠気が完全に失われ完全に意識が覚醒してしまっている。

俺は気晴らしに外の空気でも吸いに行こうと部屋を後にした。

「……………」  
無言のまま玄関口に向かおうと廊下を歩いていると二階に続く階段から妹（仮）が顔を出しているのが見えた。

「…………おい」

俺は携帯で現在の時刻を確認し、表示されている時刻が深夜の二時だと判明した所で妹（仮）に声をかける。

「…………っ」

本人は隠れているつもりだったのか、不意に俺に声をかけられ驚いた表情を浮かべている。

「…………ガキは寝る時間だ、さっさと部屋に戻れ」

しかし、今はそんな奴に付き合っている余裕もなく…………俺は強い口調で部屋に戻るようにと指示する。

「……………」

だが、妹（仮）は何を思ったのかその場に留まり、俺の背後に視線を向けるとそこに向かって指を差し始めた。

「…………っ、なんにも…………ない？」

俺は先程の夢の恐怖からか…………すぐに背後を確認し、何もない事を確認する。

そして、そんな状況の俺をからかった妹（仮）に腹を立て俺は…………

「ふ、ふざけんじゃねえぞ、てめえ！」

大声でそう罵り、奴を睨みつけた。

「…………っ」

臆病な妹（仮）は当然俺の叫び声に怯え、目に涙を浮かべながら二階の自分の部屋へと消えて行った。

「……泣かしちゃった」

奴が立ち去った直後、俺は強烈な自己嫌悪に苛まれる。

明日朝一番に謝ろう……そう考え、再び玄関口へと足を向けた。

## Episode 07・友達

外へ出ると満天の星空が俺を出迎えてくれた。

「……………」

そんな神秘的な光景を無言のまま見つめ、心を落ち着かせる。あれは悪い夢だった、そこまで心を落ち着かせる事が出来るようになった時……玄関口に誰かがやって来るのが見えた。

「よっし、今日はこれで仕事はおわ……おわっ!？」

よく見るとそれは桂木だった。

「ど、どうしたんだ、泉？　こんな所で……眠れないのか？」

俺が外にいる事に興味を持ったのか、彼女は同じ様に靴を履き外へとやって来た。

「……………ああ」

面倒なのであしらおうと適当な返答をし、彼女が立ち去るのを待つ事にした。

「そういえば、部屋に戻ったら君の妹が泣いていたんだが……何かあったのか？」

「……………別に」

桂木からその話を振られた時、妹（仮）は彼女の部屋で一緒に寝泊まりする事になったのを思い出した。

「……………そうか、どっちに非があるか知らんが早く仲直りしろよ？」

「……………」

お節介な奴だ、俺が今の発言でこいつに抱いた印象はそれだ。

別に妹（仮）と仲直りするのには良い、俺だって明日謝るつもりでいる。

だが、また部屋であの夢を見てしまったら……俺はまたあいつに理不尽な怒りをぶつけてしまいかもしれない。あれが解決されなければまた同じ結果になるんじゃないか？ そんな不安が彼女の問いに返事を返すのを躊躇わせた。

「……あ、そうだ」

そんな俺を見て何を思ったのか、桂木は右手を左手に打ち何かを思い付いた様な仕草をする。

そして、俺に視線を向け僅かに笑みを浮かべると……

「……ちよつと、コンビニ行かないか？」

そんな言葉を彼女は呟いた。

《Friend》

民宿から歩き始めて既に十分は経過している。

なのに、なのにだ……コンビニらしき店の影すら見えてくる兆しがないのは何故だ？

「……おい」

「ん、どうした？」

横で陽気に鼻歌などを歌っている桂木に俺は、何時になったらコンビニに辿り着くのか尋ねる事にした。

「……何時になったら着く？」

「ん、そうだなあ……あと三十分くらいか？」



帰ろう、彼女のその発言を耳にし、俺はそう心に決めた。

「あ、おい、何処に行くんだ？」

「……………」

そんな姿を見て桂木が声をかけてくる…………が、無視だ、無視…………コンビニ如きで一時間も歩かされるなんて御免だ。

「私の名前は桂木日向」

元来た道を戻ろうと背を向けた俺に桂木は、唐突に自己紹介を始めた。

「…………あ？」

俺は桂木が突然変な事を言い出したので、自然とそちらに視線が向いてしまった。

「今年で高三になる、去年から生徒会長を就任した」

「お、おい？」

延々と自分の事を語り出す桂木を見て俺は困惑し、どう対応すれば良いのは分からずにいた。

「趣味はオカルト、好きな食べ物辛いもの全般、好きな動物は……………」

「…………いきなり何語りだしてんだ、お前？」

流石にそろそろ止めるか、と俺は語り続けている彼女を制止させた。

「何って自己紹介だ、互いの事を知れば会話が弾むだろう？」

「…………だから、それを何で今やりだしてんだよ？」

俺は彼女の意図が読めず、怪訝な表情を浮かべ何が目的なのかを尋ねた。

「そうすれば仲良くなれるじゃないか、君と」

「……へ？」

その予想外の返答に俺は間抜けな声をあげる。

「私は君と友達になりたいんだ、泉」

「……え、ええーっと」

ここは笑う所なんだろうか？

「と言う訳で次は君の番だな？」

「……は？」

俺が困惑している間に、桂木は勝手に話を進め始める。

「私は自分の事を全部話した、次は君が話す番……そうだろ？」

「…………」

色々つつこみ所が満載だが、何を言ってもこいつは納得しないだろうなと反論するのを諦めた。

そして、彼女の言葉に従い……同じ様に自己紹介を始めた。

「……はあ、俺の名前は」

・ ・ ・

「お買い上げありがとうございます」

そんな定番の台詞を店員から告げられ、俺は購入した品が入ってるビニール袋を手にとった。

「お、泉何を買ったんだ？」

「雑誌とアイス、一応……あいつの分も」

その後、結局桂木に強制的にコンビニまで連れて来られてしまった。来たら来たで何も買わないのは損だと俺は、暇潰し用の雑誌と明日妹（仮）に謝る時に渡そうとアイスも購入したのだった。

「ふむ、一応兄としての自覚はあるみたいだな」

「……うるせえ」

中を覗いて感心している桂木を鬱陶しく感じ、俺は彼女が覗いていた袋を取り上げた。

「なんだ、恥ずかしいのか？」

「……別に、ただお前に言われるのが嫌なだけだ」

そっぽを向き視線を合わせようとしない俺を見て、桂木は憎たらしい笑みを浮かべている。

「全く、お前はもう少しすな」

桂木がそう俺にいらぬ説教を展開しようとした所で彼女の携帯が鳴り出した。

「ん、こんな時間に着信？」

桂木はすぐに携帯を取り出し、着信状況を確認する。

「……あ」

どうやらそれはメールだったらしく、その記録を見た桂木は僅かに驚いた表情を見せた。

「ん、友達からのメールか？」

「え、あ、いや……すまん、ちょっと先に店出てる」

俺が適当にその話題を振ると桂木は動揺し、逃げる様に店の外へと出ていってしまった。

「先につて……俺、買い物済んでるんだが？」

走り去る桂木にそう呟いてみたが聞こえていないらしく、俺はどうしたものかと頭を掻いた。

数分後、店員の視線に耐えられなくなった俺は仕方なく店を出た。

そして、携帯を見つめたまま動かない桂木の元へと歩み寄る。

「……兄さん」

近づいて見て分かったが、桂木は泣きそうな表情を浮かべ携帯を見つめていた。

「おい、桂木？」

「……っ」

俺が声をかけると桂木はようやく俺の存在に気づいたのか、大慌てで携帯をしまい何事もなかったかの様に笑いかけてきた。

「い、いやあゝすまない、久しぶりに知人からメールがきて驚いてしまつてね」

「……」

俺は声をかける時に聞いてしまった兄さんという言葉が気になり、桂木のその言葉を信じる事が出来なかった。

「さて、何買おうかな？ 泉、何かおすすめはあるか？」

「ああ、それなら……」

こいつにはこいつで何か抱えているものがある、そう感じた俺は深く考えない様にして彼女の買い物に付き合う事にした。

## Episode 08・名前

「……ああ、だりい」

早朝、俺は逃げるように部屋を飛び出し、眠気を覚ます為に洗面所で顔を洗っていた。

昨夜、コンビニから帰ってくると再び背筋が寒くなる様な現象が俺を襲ったからである。

「……よ、ようやく戻ってきた」

一時間かけて戻ってきた俺と桂木は、買ってきた食い物なんかを一緒に食べる為に自然と俺の部屋へと招く事になった訳だが……

「ははは、やはり都会育ちは体力がないというのは本当みたいだな？」

「いや、俺が特別体力ないだけだと思うぞ？ 普段家ではネットゲ三昧だし」

流れる汗をバッグから取り出したタオルで拭い、桂木の話に耳を傾ける。

「ん、ネット、ゲ？ なんだそれは？」

「……いや、こつちの話だ」

流石に暇な時は四六時中ネットゲをやっている廃人だと知れたら、桂木もドン引きしそうなので誤魔化す事にした。

「……ふむ、所でこの部屋はどうだ？ 以前私が使っていた部屋なんだが、なかなかに住み心地が良いと思うのだが」

「……え、っ？」

俺は桂木から突然、信じられない事を告げられ間抜けな声をあげた。

「ん、何か変な事を言ったか？」

「い、いや、別に」

桂木の様子から、彼女が使っていた時はあの恐ろしい奴が現れなかったのだと悟った。

「ただ壁に飾られてる掛け軸、あれだけは苦手だったな」

「……………」

一応、桂木も俺と同じ様にあの画から嫌な気配は感じている様だ。

「ずっと目を閉じたまま怨みのこもった表情を浮かべている、何か不気味な画だよな」

「ああ、俺もそうおも……………ん？」

いや、待て……………今桂木の言葉に違和感を感じ、俺は頭の中で彼女の言葉を再び再生させる。

ずっと目を瞑ったまま怨みのこもった表情を浮かべている。

ずっと目を閉じたまま……………

「おいおい、目を閉じた……………って？ ああの画に描かれている女の話だよな？」

「ああ、そうだが？」

俺は桂木との意見の食い違いに戸惑い、再確認する様にあの画の事を尋ねる。

「なら、ばつちり目が開いてるだろ、それこそ恨めしそうな目で」

「……………君は、何を言ってる？」

そう、確かに俺が部屋に案内され、あの掛け軸を見た時は中の女は目を開けていた。

なのに、桂木は俺の主張が間違っているかの様に怪訝な表情を浮か

べる。

「いや、だから、あの画の……」

「あの画の女性は、確かに目を閉じていたはずだ」

再び意見が食い違う様な発言を桂木が呟いた為、俺は更に困惑する事になった。

「おま、冗談もほどほどに」

「冗談ではない……ほら」

俺は桂木の洒落にならない冗談に怒りを覚えたが、彼女が確認する様にと掛け軸を手にとって見せてきた所で何方の主張が正しいかが判明する事になる。

「なつ、嘘だろ……？」

そして、正しい主張をしていたのは……

「……目、閉じてる」

桂木の方だった。

《Name》

そんな理由から警戒して一睡も出来なかった俺は、今非常に体調がよろしくなかったりする。

かと言って眠いかと言えばそうでもなく、むしろ目が冴えすぎて困っているくらいだ。

その原因は、昨日の一件と自宅で生活していた時にネトゲ生活で培った不眠スタイルが定着してしまっているからだと思われる。

「おや、ゆー坊？ あんた、随分早起きだねえ」

洗面所から出てきた所で婆ちゃんと遭遇し、その声をかけられる。

「まあ、色々あつてさ……はは」

「……？ 良く分からない子だねえ」

俺だつて好きでこんなになつてゐる訳じゃない、そう心の中で毒づき婆ちゃんへの怒りを解消させる。

「悪いけど朝ご飯はもう少し後になるよ？ お客様に出すのが先だからね」

「へいへい」

別にそこまで腹も空いてないので気にしないのだが、婆ちゃんには俺が腹が減っている様に見えた様だ。

その後、桂木も起きだし話相手にでもなつてもらおうとしたが、この民宿は実質婆ちゃんと桂木の二人で切り盛りしているので彼女にそんな暇があるはずもなかった。

なので、二人がせつせと働く姿を横目に邪魔するのは悪いとその場から退散する事にした。

二人の仕事場から飛び出してきた俺は、朝食の時間まで何をしようかと考えながら廊下を歩いていると……

「……………」

二階へと続く階段の隙間から昨日と同じ様に妹（仮）が顔を覗かせていた。

「……………」

突然現れた事により、互い反応するのが遅れて無言で睨み合う形となる。

一応、年長者である俺がこの場合声をかけた方が良かったらうときこ



ちない笑顔を浮かべ、妹（仮）に近づいた。

「よ、よお」

「……………」

相変わらず、奴は無言で俺を睨みつけている。

近づいてみて気づいたが、昨日の夜に俺が怒鳴った事を気にしているのか僅かに体を震わせていた。

「き、昨日は……その、すまなかった」

「……………」

俺は怯えている妹（仮）を見て、罪悪感が芽生え素直に昨日の夜の事を謝る事にした。

ただ奴の顔を直接見ながら謝る事が出来ず、顔を逸らした状態でだけど……

「ちょっと嫌な事があってお前に八つ当たりしちまった、本当にごめんな」

「……………」

そう言つて頭を下げた俺を妹（仮）は暫く見つめていたが、納得した様に頷き……俺を許した事を伝える為なのか何故か頭を撫でてきた。

「……………」

昨日の夜も同じ様な事をされたが、こいつは人の頭を撫でる癖でもあるのだろうか？ そんな事を考えながら妹（仮）の好きに頭を撫でさせた。

十歳も歳の離れた妹（仮）に頭を撫でられるダメな兄貴、そんな嫌な光景が暫く続いたが奴もようやく飽きたのか手を元の位置へと戻した。

「あ、そ、そうだ、お前アイス食うか？ 昨日、お前の分も買ってきたんだ」

急に照れくさくなった俺は、昨日の夜に桂木と買ってきたアイスの話へと話題を変更させる。

アイス、その単語を発した途端に妹（仮）の様子が豹変し、早くよこせと言わんばかりに俺の左腕を両手で掴み力強く握手を求めてきた。

「と、とりあえず、朝飯食い終わってからな？」

狙い通り話題を変える事には成功したが、妹（仮）の豹変具合に俺は驚きを隠せなかった。

それに頷き婆ちゃんの元へ走って行こうとする妹（仮）を見て、俺はこの時間は二人が仕事で忙しい事を奴に言っただけで聞かせた。

すると、俺と同様に部屋に戻っても何もする事がないせいか……

・ ・ ・

俺の部屋に来た。

「……………」

当然、少しは話せる様になったとは言え微妙な関係である俺達は話す話題もなく無言のまま時間だけが無駄に浪費されて行くのだった。

このままではまずいと感じた俺は、何か話すことはないかと必死に

話題を探した。

以下、そうやって奮闘する憐れな兄の姿である。

## 第一回

「きよ、今日は良い天気だなあ？ お前もそう思うだろ？」

「……………」

## 第二回

「そういや、昨日夜コンビニ行つてさ？ そんで……………」

「……………」

## 第三回

「しかし、親父の奴どうしてんのかねえ？ 一度連絡してみるか？」

「……………」

…………… お願いです、何か言つて下さい。

ま、喋れないんじゃない訳なんだが……………ん、喋れない？

「……………つ、そうかつ」

俺は唐突に名案が浮かび、歓喜のあまり目の前にあつた机を強く叩いた。

その音に妹（仮）は驚き、俺の方へと視線を送ってくる。

そんな妹（仮）に俺は自慢気な表情を浮かべ、考えついた名案を口にする。

「喋れないなら、紙に文字を書かせれば良いじゃないかつ」

俺は自分の荷物から適当な紙とペンを取り出し、妹（仮）に手渡す事にしたのである。

「よし、では自己紹介から頼むぞ？」

その紙をじっと見つめている妹（仮）に自分の事を書くようにと指示を出した。

「……………」

奴はそれに頷くと小さな手で必死に文字を書き、俺に手渡してきた。

「ふむ、どれどれ？」

渡された紙を俺は凝視し、何と書かれているか読み上げる事にした。

「……………」

したのだが、その文字は全て英語で書かれていた。

そんな俺の横では妹（仮）がようやくコミュニケーションが可能になったと嬉しそうな表情を浮かべている。

「……………」

俺は何とか妹（仮）の期待に応えようと切磋琢磨するが……

「読めんっ」

結局、読む事が出来ず投げた。

それを見た妹（仮）は酷く落胆した様子で表情を暗くさせた。

そして、無言で俺が投げた紙を拾おうとしている姿が目映る。

その時、妹（仮）が手にした紙が揺れ、俺の方へ文章が見える形となった。

「……………」

それをぼんやり見つめ、目に留まった文章を適当に口走る。

「エヌ、イイ、エル、エル、ワイ……ネリー？」

それを口にした途端、暗い表情を浮かべていた妹（仮）が一瞬に明るい表情へと戻って行った。

「もしかして……」

俺は妹（仮）の様子から、この言葉の意味を直感的に理解する。

「……これ、お前の名前？」

「……………」

その言葉を言い終える前に妹（仮）は、何度も力強く頷き嬉しそうな表情を見せた。

妹（仮）の……いや、ネリーの名前が判明した所で婆ちゃんから朝食の準備が出来たという知らせが来た。

なので、俺は早速判明したその名前を口にする。

「さあ、朝飯だ、ネリー行くぞ？」

「……………」

それに応えるかの様にネリーは、俺の腕を掴み婆ちゃんの部屋へと一緒に歩き出した。

この瞬間から俺が奴の事を妹（仮）……そんな風に呼ぶ事はなくなった。

## Episode 9・絵

「へえ……じゃあ、ネリーちゃんって言うのかい？」

朝飯を食べる前に、俺はネリーの名前が判明した事を二人に話していた。

「しかし、君は……こんな英文も分からないのか？」

「うっせ、ゆとり世代なめんな」

その食卓の中で俺は自分では解読不可能だったネリーの英文を桂木に渡し、翻訳してもらっていた。

「……威張る事じゃないと思うが、えつとなになに？」

桂木に例の英文を読んでもらい、内容が明らかにされる。

どうやら、それは本当に俺が指示した通り自己紹介が書かれている様だった。

好きな動物やら好きな色やらが書かれている中で一つだけ非常に納得してしまふ記述があった。

好きな食べ物アイス……納得。

「ま、こんなものだな」

「ご苦労」

「何で君はそんなに偉そうなんだ？」

桂木が後ろで何やら呟いてるが無視し、俺はさっさと飯を食べ始めた。

「ふっふっふ」

唐突に婆ちゃんが飯を食べている俺とネリーを交互に見て、不気味に笑い出した。

「な、何だよ……婆ちゃん？」

「いやね、昨日と比べると随分仲が良くなったなあと」

俺は婆ちゃんにそう指摘され、無意識の内にネリーの横に座っておかずと取り分けてやっている事に気づいた。

「うつ、べ、別に兄妹なんだから普通だろ」

「そうだねえ、普通だねえ……ふっふっふ」

この婆さん殴りてえ……そんな衝動に駆られたが流石に傷害事件は起こしたくないので抑える事にしたのだった。

## 《Picture》

「えつ、仕事……？」

「ああ、ちゃんとバイト代は支払うよ？」

朝食を食べ終え、部屋に戻ろうとした所で俺は婆ちゃんに呼び止められていた。

そして、暇なら仕事をしないかという誘いがあつた訳である。

「……仕事の内容によるかも」

「なあに、凄く簡単な仕事さ」

婆ちゃんが俺に頼もうとしている仕事とは、村の近くにある山で湧き出ている天然水を渡された容器に汲んでくる事だった。

「ちなみに、何でわざわざ山の水？」

「あそこの水を使うと料理が美味しく作れるんだよ」

確かに家で食うより、ここのご飯のが美味しいなと思いながら婆ちゃんの話に再び耳を傾ける。

何でも俺達が来るまでは水汲み業者に頼んでいたらしいのだが、最

近は利用料金が上がってなかなか頼む事が出来ずにいたみたいだ。

「……それで俺に？」

「うむ、若いし体力もあるだろう？」

いや、それはない事が昨日証明された訳ですが……

そう口にしようとした所で、自分の現在のお財布事情を思い出した。今月は既にゲームを買ったり買い食いなどを繰り返していたせいで非常に厳しい状況だったりするのだ。

それに夏休みの間だけと言ってもネットがない生活は耐えられない、つまりネカフエなどに通う金も必要なのだ。

俺は色々考えた末に……

「わかった、やるよ」

その仕事を引き受ける事にした。

・ ・ ・

俺は婆ちゃんに手渡された水を汲む容器を片手に何も無い田んぼ道を進んだ。

無言のまま歩く俺の足音とその俺の背後を付いて来る何者かの足音だけがその場に響き渡る。

「……お前、何してんの？」

そして、遂にそんな世界にうんざりした俺が背後にいる何者かに声をかけた。



「……っ」

その何者かは俺に突然声をかけられ驚き、急いで物陰へと姿を消した。

しかし、その一部始終をばっちり目撃している俺にとっては全く意味のない行動である。

俺の視線と物陰から見つめる何者かの視線が交差し、暫く沈黙の境界が訪れる。

「……………」

その後、観念したのか例の何者が……ネリーの奴は姿を現した。

「で、何で尾行してたんだよ？」

俺がその質問をすると何処に隠し持っていたのか、自己紹介の時に渡してやった紙とペンを取り出して何やら絵を描き始めた。

どうやら、俺が英語を読めないのを理解したのか絵で意思疎通をしようと考えた様だ。

暫くの間、ネリーが絵を描き終えるの待っていると納得したかの様に一人で頷いて俺に絵が描かれた紙を渡してきた。

「……どれどれ」

それを目にした瞬間、俺は口を閉ざし叫びたくなる衝動に駆られた。

何故ならネリーの奴が描いたのは、昨夜に俺の夢の中に現れた……掛け軸の女だったからだ。

その紙に描かれている女性は着物を着ており、目が……黒く塗りつぶされている。

「……おい」

俺はその絵の描かれた紙を握りしめ、描いた本人であるネリーに視線を向ける。

「……………」

ネリーは俺が視線を向けると何事もなかったかの様に笑顔を浮かべた。

「……………どういふつもりだ？」

昨夜にネリーの奴が俺の背後を指さした事を思い出し、表情を曇らせる。

彼女はそんな俺の心境などお構いなしに再び左手を掲げ背後を指さした。

昨夜と全く同じ行動、神経を逆撫でする様な行為……………それに対して俺は……………

「……………お前、いい加減にしろよ」

「……………」

俺が怒っている事に気がついたのか、彼女の顔から笑顔が消え怯えた表情へと変化する。

「……………目障りだ、ついて来るな」

そして、その言葉を最後に彼女は目に涙を浮かべて婆ちゃん家へと引き返して行った。

再び彼女に怒りをぶつけてしまっただった。

## Episode 10・巫女

「はあ……」

あの後、猛烈な自己嫌悪に陥りながらも俺は婆ちゃんが話していた大鶴山へと辿り着くことが出来た。

山の入り口は古びたバス停のすぐ隣に存在し、横には熊出没注意の看板が設置されている。

「ま、熊なんて滅多に遭遇するもんでもないだろ」

俺はその看板を無視し、山の湧き水を求めて山奥へと足を踏み入れた。

・ ・ ・

……この世界には“フラグ”というものが実在する。

「はあ……はあ……」

現在俺と仲良く追いかけてつこを繰り広げている彼がそれを証明してくれた。

では、紹介しよう……先程山の中で知り合った

「があああああっ！」

森の熊さんだ。

「つて、馬鹿あああ」

俺は背後から迫ってくる熊について冷静に説明している自分自身に  
つつこみを入れた。

そう俺は見事に山に入る直前に“熊遭遇フラグ”立ててしまっていたのである。

もし、過去に戻れぬのならあの時の自分を全力でぶん殴りたいなどと現実逃避を始める。

……が、今となつては既に遅く奴は俺との距離を着実に縮めてきている。

流石に新聞で少年熊に襲われ死亡などという記事を掲載されたくはないので必死に逃走を図る。

「ぜえ……ぜえ……」

そして、数時間の逃走劇の末に自分でも登れそうな木を発見し……  
物凄い速度でよじ登り事なきを得た。

「木上まで……逃げちまえば……追つて来れないだろ……」

既に体力に限界を感じている俺は木の上で体を休めながら、地上から恨めしそうにこちらを見つめる熊に視線を向けた。

「……………」

熊は暫く俺のいる木周辺を歩き回っていたが、結局断念して何処かに姿を消した。

これようやく一息つける……そう思った矢先である。

「うおっ!？」

突如、木から物凄い衝撃が伝わってきた。

一体何が……？　そう思い、木下を眺めると先程の熊が……

「があああああっ！」

……元氣よく木に向かって体当たりを決めていた。

「じゃ、洒落になつてねえ」

俺がそんな言葉を呟いた時、下の熊は五発目の体当たりを直撃させようとしている所だった。

「あゝ あああああああっ」

その瞬間、俺の悲鳴と共によじ登っていた木は鈍い音を立てて真つ二つに折れていった。

## 《Shrine maiden》

「あゝ あゝ…… あづい」

私は空で煌く太陽を鬱陶しく思いながら、妹に任された境内の掃除を始めた。

大鷗山の山奥に存在する寂れた神社、榊神社と呼ばれているこの場所ですと妹は神社の巫女を務めている。

参拝客など滅多に訪れない神社なので真面目に仕事をこなす必要はないと思うのだが、妹の榊周さかき あまねは巫女としての仕事に誇りをもっているらしく怠ける事を許してくれないのだ。

「あゝ あゝ…… だるい」

なので、今日も私はこんな猛暑の中でも我慢して無駄に広い神社の境内の掃除をしている訳である。

「あゝ あゝ…… 「姉さん、境内の掃除は捗っていますか？」」

本日三度目のあゝ発言をした所で妹が自分の仕事を終わらせ、私が真面目に仕事をしているかどうか確認しに姿を現した。

当然だが、私は暑さにやられて手にしている箒を全く動かしていないので仕事が終わっているはずもなく……むしろ、始めてもない状況だったりする。

「はあゝ……全く、姉さんは……」

その様子を見て私が全く仕事に手をつけていないのを悟ったのか、妹は大きな溜息をもらしお決まりの説教モードへと移行した。

「良いですか？ 私達是由緒正しき榊の巫女として神社に祀られている神に」

「ああーっ、はいはい、じゃあちよつと反省も予て近くの滝で水浴び……じゃなかった、滝行してくるわ」

妹はこうなってしまうと話が長くなるので私は適当に理由を付けてこの場から退散する事にした。

「あ、こら！ 姉さん、話はまだ」

背後で妹が何やら騒いでいるが無視し、私は神社の近くに存在する大鵜滝に向かった。

「こんな暑い日に境内の掃除なんかやってられるかつての」

そう愚痴をこぼしながら、私は着ている巫女装束を脱ぎ持ってきた白衣へと着替える。

「……ふう、極楽極楽」

そして、大鵜滝から流れてきている河川にゆっくりと浸かった。

「はあゝ……もう少し浸かったら謝りに戻るかな」

全身から溢れでた汗を洗い流し、再び仕事に対するやる気を取り戻しかけた時である。

「あゝ ああああああ ああつ」

それは情けない叫び声と共に現れた。

と言うより、横の茂みから木が倒れてきてそれにしがみついた状態で何者かが落下してきたのである。

「え………？」

私が呆気にとられている家に、そいつは私が浸かっている河川へと落下し水中へと消えた。

「え、えつと………」

私は前方に倒れている大木を凝視しながら、自分の目の前で起こった出来事を整理する。

水浴びをしていたら突然横の茂みに在った木が折れ、それにしがみついていた何者かが木と一緒にこの河川へときた………？

「……考えれば考えるほど謎だわ」

という訳で私は深く考えるのを放棄した。

「ぶつはあ！？」

その直後、酸素不足で苦しくなったのか水中から何者かが飛び出してきた。

「し、死ぬ………っ！ まじで死ぬ………っ！」

水中から飛び出てきたのは私とそう歳が変わらない青年だった。

「ちょ、ちよつと……あんだ大丈夫？」  
流石に心配になった私は何かに怯えて顔を蒼くしている青年に声をかけた。

「……ひ、人！？ た、助かった！」  
すると、私の存在に気づいた青年は表情を明るくして此方へ向かって走りだした。

「はあ……はあ……お願いだ、助けて」  
両手を広げ、息を切らせながら迫ってくる青年。

「……っ」  
その姿に嫌な気配を感じた私は、その青年の顔に……

「ぐうえっ!？」  
条件反射で正拳突きを叩き込んでいた。

「な……ぜ……？」  
「……何か気持ち悪かったから」  
とりあえず、嘘は良くないので殴った理由を素直に彼に説明する。

「お、ま……それ、理不尽……すぎん、だろ」  
その私の言葉を聴き終えた青年は、再び倒れこんで水中に姿を消した。

彼が水中に消える瞬間、妙な達成感を感じた私は……やっぱり巫女に向いてないんだと改めて思った。



## Episode 11・喧嘩

「うっ」

顔から激しい痛みを感じ、意識が覚醒する。

目を開けると見慣れぬ天井が視界に飛び込んできた。

「ここは？」

俺は咄嗟にその言葉を口にし、起き上がろうと体を起こした。

「あ、お目覚めになりましたか」

すると、眠っていた部屋の扉が開かれ渡り廊下から巫女装束を着た少女が姿を現した。

「え、えっと」

俺は今現在自分が置かれている状況が理解できず、彼女の問いに答えられずに首を傾げる。

「あ、すみません、まずは自己紹介からですよね？」

その俺の反応を目にし、何を思ったのか少女は勝手に一人で自己紹介を始めた。

「私の名前は榊周さかきあまねと言います、周とお呼び下さい」

「はあ、俺は泉豊って言います」

相手が名乗ってきて自分が名乗らないのはまずいだろうと思い、自分の名前を名乗り返した。

「泉さんですね？ はい、覚えました」

周はそう口にする優しい表情を浮かべ、此方に微笑みかけてきた。

「あ、あのそれで周さん？　ちょっとお尋ねしたい事があるのですが？」

「はい？」

俺は今一番知りたい事柄について周に質問を投げかける。

「此処って何処ですか？」

周囲を視線を巡らせ、和風情緒溢れる畳張りの部屋を眺めた。

# 《Quarrel》

「此処は山の神である大鶴様を祀るために建てられたお社でございます」

は？　山の神？　大鶴様？　この子は何を言っているんだと本気で頭を抱えそうになるが周の衣装が巫女装束である事を思い出し、彼女の言葉に納得する事が出来た。

「や、社？　神社って事？」

「はい、そうです」

では、何故自分は神社なんかで眠っていたのだと考え始めた時である。

「ようやく、お目覚め？　全く、男のくせに軟弱ね」

突然、部屋の扉が開けられ、周と同じ様に渡り廊下から少女が顔出した。

勿論、周と同じで彼女も巫女装束を着ている。

「あっ」

その少女の姿を目にし、今まで俺の中で眠っていた記憶が呼び起こされる。

「お前、あん時俺を殴った女か？」  
そして、全てを思い出した俺は偉そうに此方を見ている少女に腹が立った。

「そうだけど？」

しかし、彼女は俺が睨みつけても全く動じずに太ましい態度で部屋の中へと入り込んできた。

「え、えつと？」

俺とその少女は睨み合い、一触即発な状況となり、間に挟まれた周は焦った様子で視線を泳がせている。

「謝れ」

「嫌」

暫く睨み合いが続いたが黙ったままでは何も解決しないと思い、謝罪の言葉を少女に要求するがその言葉を口にした途端、即座に拒否された。結果、その受け答えにより更に場の空気が悪くなってしまった。

「そ、そうだつ」

その空気に耐えられなくなったのか、突然周が何かを思い出したかの様に手を叩き、話題を変えようと別の話を始めた。

「お、お二人とも喉乾きませんか？ 乾きますよね？ 冷たいお茶でも持ってきてますね」

別に俺も目の前の少女も一言も言葉を交わしていないのだが周は勝手に一人で納得して部屋から飛び出していった。

「……………」

残された俺と少女は、二人きりになったからといって仲直りするは

ずもなくお互い気まずい状況が続いた。

「そういえば」

「何よ？」

流石にこれ以上睨みつけた所で効果があるとも思えず、俺はあの時の状況を思い出して少女に気になった事を尋ねてみた。

「熊、どうした？」

そう、俺を襲撃した熊は何処に消えたのかである。

「熊？ そんなのいなかったわよ？」

しかし、彼女の返してきた言葉により新たな疑問が浮上した。

「えっ？ いや、いただろ？ 馬鹿でかい熊が？」

「はあ、いなかったって言うてるでしょ？ 木が倒れてきたのは驚いたけど、本当にそれだけよ」

冗談じゃない、では俺が襲われた熊は一体何なんだ？ と彼女を問いただそうとしたが見ていないと言っている以上、しつこく尋ねるのは悪いと思って我慢する事にした。

「しかし、あんたねえ？」

俺がその件に関して疑問を残しながらも納得した所で今度は少女の方から何やら尋ねてきた。

「ん？」

「いくら私が可愛いからって突然抱きついてくるとか何処の変態よ？」

その彼女の理解不能な質問に俺の思考は一時的にストップした。

は？ この女は何を言ってるんですか？ そんな心の眩きが口から

出そうになるが何とか堪えて彼女の話に耳を傾ける。

「目が合ったと思ったら、突然息荒くして両手広げて迫ってくるとか本気で寒気がしたわ」

俺は彼女の発言を聞き、あの時の自分のとった行動について思い出していた。

「……………」

確かに誤解されるには十分な行動を俺はとっていた気がする。

「すみませんでした」

とりあえず、謝っておいた。数分前とは真逆な立場である。

「全く、これだから男は」

彼女のその発言が耳に届き、俺の中で再び怒りの炎が燃え始める。そもそも変態的な行動をとったとは言え、初対面な相手の顔を殴るといのはどうなんだ？ しかも、自分で自分の事を可愛いとか自意識過剰すぎるだろ？

「ねえ、聞いてんの？」

どうやら、彼女は俺に何か語りかけていたらしく話を聞いていたかどうか尋ねてきた。その彼女の反応に応じるかの様に俺は自然とその言葉を口にしていた。

「うるせえ、性格ブス」

「……………」

あ、と思った時には既に手遅れで目の前の少女は再び怒りの表情を浮かべ始めた。

「と、森の熊氏が申しておりました」

とりあえず、延命処置の為に俺は言い訳などしてみるが、勿論それで彼女の怒りがおさまるはずもなく、俺達は再び喧嘩を始めた。

そこへ冷たいお茶を携えて戻ってきた周は、再び喧嘩をしている俺と少女の姿を目にし、疲れきった表情を浮かべていた。

## Episode 12 - 1・神壺

その後、周の仲裁により少女とは一時休戦となった。そして、今現在互いに名前を知らないままでは色々と不便だろうと周の時と同じ様に自己紹介を始めた。

「私の名前は榊雅。<sup>さかきみやび</sup>一応、ここにいる周の姉でこの神社の責任者。あんたは？」

「俺は泉豊」

俺と雅は一時休戦とはいえ仲が悪いのは相変わらずなので互いに睨み合い、自己紹介を続ける。

「ヨロシク」

互いに差し出した手を全力で握りしめ、握手なのか握力勝負なのか分からない状態となる。

そのまま喧嘩の第二ラウンドかと思いきや後ろで待機していた周が咳払いをしたのを目にして争うの止めた。

「あんたとは何時か決着をつけなきゃいけないみたいね」

「望むところだ」

そんな漫画にありそうな決め台詞を二人してを口する。

「はあ……」

そんな後ろ姿を見た周に俺達は呆れられてしまった。

「しかし、何であんたはこんな山奥まで一人でやって来たのよ？」  
互いに言いたい事を言い終えた所で雅がこの山にやって来た目的を俺に尋ねてきた。なので、俺は婆ちゃんから仕事を任せられ、この山の湧き水を汲みに来た事を説明した。

「なるほど、うちの神社の参拝客じゃなかったのね」

「俺がそんな事をする様な奴に見えるか？」

「見えないと即答し、目的である湧き水は俺が雅と出会った滝から流れる水の事であると教えてくれた。」

「何だ、すぐ近くだったんだな」

「んじゃ行くかと俺は二人に礼を言い、布団から這い出でて目的の滝へと出向こうとしたのだが……」

「泉さん、ちょっと待っていただけませんか？」

それを何故か周に止められた。

「ん、何だ？ そろそろ帰らないと婆ちゃんに怒られる」

別に婆ちゃんからは戻ってくる時間を指定されていた訳ではないが、早くこの危険な山から立ち去りたいので嘘をつく事にしたのだ。

「これは一応忠告です。あそこの水を汲みに行くのなら社で祀られている神、大鷲様に挨拶しておくべきです」

「……は？」

《God 1 / 2》

思わず口が滑り、そんな言葉が口から漏れる。

それ程までに彼女の忠告とやらが理解不能であつたからだ。

「あそこの水は、本来うちん所の神が体を清めるために存在しているもんなのよ」

「なので、人が勝手にあそこの水を利用しようとすると大鷲様の怒



りに触れる可能性があるのです」

などと、今度は姉妹二人して現実離れた話を俺に聞かせてくれた。

「あ、ああ、その、なんだ、笑えばいいのか？」

それを聞いた俺は、二人が協力して俺に冗談を言っているんだなと思ひ微妙な笑みを浮かべてみた。

「冗談じゃありませんよ？ 実際到大鵜様の許可なしに水を汲んでいた人達が大怪我を負った事もあります」

だが、それを二人は真顔で流し、冗談ではないと念を押してくる。

「悪い事は言わないわ、うちの神に挨拶してから行きなさい？ すぐに済む話なんだから」

そんな現実離れた話があるかと二人にツツコミを入れようと思つたが、夜に俺の首を締めてきた女の幽霊の事を思い出して従う事にした。これ以上、面倒な事に巻き込まれるのはご免だからである。

「では、参りましょうか？」

俺は二人に案内され、部屋の外へと出る。そして、導かれるままに歩き神社の裏手に存在する怪しげな洞窟の前へとやって来た。

「暗いから足元に気をつけなさい」

雅にそう言われ、彼女の後に続いて中へ入った。すると、注意された通り中は所々蠟燭が点在している。だが、前方を歩いている雅を姿を確認するのがやっとという明るさで一步一步慎重に進む必要がある。

「安心してください、転んでも私が後ろから支えますので」

後ろから付いて来ている周にそう励まされ、暗闇による恐怖を少しだけ和らげる事が出来た。

「暗いからってセクハラすんじゃないわよ？」

「安心しろ、お前には絶対しない」

前から雅にそう茶化され、売り言葉に買い言葉と彼女が怒り出しそんな返事を返した。

「……………何ですって？」

すると、予想していた通りに彼女は怒り出して俺の方へと振り返る。

「もう、こんな所で喧嘩しないでください」

お望みの第二ラウンドと思ったが、場所が悪かったらしく後ろに周に注意された。

「ほら、周が困ってるだろ？ 早く進め」

これを利用する手はないと最近流行りのドヤ顔で便乗し、雅に注意を促した。

まあ、当然暗いのでやつには全く見えていない訳だが……

「……………あんた覚えてなさいよ？」

残念だが今すぐ忘れる、俺は殴られた恨みを晴らすことが出来て大満足である。そんな頭の悪いやり取りをしている間に目的の大鷗様とか言う神が祀られている場所へと辿り着いた。

二人が神妙な御面持ちで神やら祟りやら言っていたので一体どれだけ凄い神様なのか期待していたのだが……

「おい、神様って……これ？」

今、俺の目の前には何処かで見かけた覚えのある猿の様な姿をした銅像が置かれている。

「そつよ、驚いたでしょ」

「……別の意味でな」

俺はその間抜けな猿の像を目にし、完全に拍子抜けしてしまった。何故なら、俺は二人の口ぶりから勝手に糸目でパンチパーマの素敵な神の姿を想像していたからである。

しかし、待っていたのは所々作りが雑な小汚い猿の像。

二人に祟りがどうのこうのと凄まれ、僅かに抱いていた恐怖心がこの像を目にした事で一気に薄れた気がした。

「……あ、思い出した」

「ん、何がよ？」

そこで俺はこの像に既視感を感じていた原因について思い出した。それは、この島にやってきた時に乗り込んだオンボロフェリーの事である。俺が不幸な事故により破壊した猿のオブジェ、あれとこの像が非常に酷似しているのである。

「さあ、好きなだけ拝んでいきなさい」

「……………」

俺の中では既に目の前の像からは神の威厳とやらが全く感じられず、手を合わせるのに抵抗があったが反抗すれば再び厄介な事になりそうなので黙って彼女に従う事にした。俺は無言で像に近づき、瞳を閉じて手を合わせる。

願掛けとは違うのだが、俺は無意識の内に早く自宅に帰れますようにと願っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4075s/>

---

Pandemonium

2011年11月2日18時13分発行